子ざると母ざる

母が子供に読んできかせてやる童話

小川未明

青空文庫

ある日、かりゅうどが山へいくと、子ざるが木の実を拾ってたべていました。もうじきに冬がくるので、木の葉は紅く色づいて、いろいろの小鳥たちが、チッ、チッ、といって鳴いていました。

かりゅうどは、子ざるを見つけると、足音をたてぬように、近寄りました。

「はてな、子ざるひとりとみえるな。親ざるはどうしたろう?」

あたりを見まわしたけれど、母ざるの姿が見えませんでした。

「きっと子ざるめが、母ざるの知らぬまに、遊びに出たのだ。鉄砲で打つのは、かわいそうだ。どれ、つかまえてやろう。」

かりゅうどは、腰につけていた、つなで、おとしを造りました。そして、自分は、その端をにぎって、木の蔭に隠れていました。

それとも知らずに子ざるは、木の実をさがすのに夢中になっていました。そのうちおとしの中へ入って、はっと思うまに、子ざるは、かりゅうどの手に捕らえられてしまいました。

かりゅうどは、村へ帰ると、子ざるを家の前の木につないでおきました。すこし馴らして、町へ売りにいこうと思ったのです。

村の子供たちは、見物にきて、芋を投げてやったり、かきを投げてやったりしました。子ざるは、上手にそれを受けて、食べていましたが、山の林で、拾ってたべた木の実のようにおい

しくありませんでした。寒い西風が吹いて、木の枝が動くのを見ると、山のお家が恋しくなるのでした。

「お家へ帰りたいな。ひとりでは、道がわからないし、自分の力では、腰についている鎚を切ることができない。」

子ざるの目からは、熱い涙がわきました。

そこへ、つえをついて、白いひげのはえた、おじいさんがきました。

「孫たちがほしがるので、この子ざるを、私に売ってくださらないか。」といいました。

「おお、酒屋のご隠居さんですか。あなたが、このさるを買ってくだされば、私は、町へ持っていく骨おりなしにすみます。」と、かりゅうどは、答えました。

子ざるは、こうして、その日から、酒屋の正ちゃんや、かね子さんの遊び相手となったのです。

かね子さんも、正ちゃんも、どちらも欲張りでした。

「このおさるは、僕のだよ。」と、正ちゃんがいうと、

「いいえ、このおさるさんは、私のよ。」と、かね子さんがいいました。

「ちがうよ、僕のだから。」

二人は、たがいにいい争って、祖父さんのところへききにきました。

祖父さんは、ただ笑って、返事にお困りになりました。

「さあ、だれのだろうな。それは、おさるさんにきいてみるのが、いちばんいい。」と、祖父さんは、おっしゃいました。二人は、こんどは、子ざるのところへまいりました。

「おさるさん、僕のだねえ。」と、正ちゃんが、いいました。

「おさるさん、私のだわねえ。」と、かね子さんが、いいました。

りこうな子ざるも、やはり返事に困って、しばらく頭をかしげて考えていましたが、

「私は、私をいちばんかわいがってくださる方のものになります。」と、答えたのです。

正ちゃんにも、かね子さんにも、子ざるの返事が、わかったでしょうか？

山では、母ざるが、かりゅうどにつれられていった日から、夜も昼も子ざるのことを思って忘れる日がありませんでした。

「いまごろはどうしているだろう。あれほど、遠くへひとりで遊びにいってはならぬといったのに、いうことをきかないばかりにこんなことになってしまった。達者でいてくれるだろうか。」と、里の方を見て心配していました。

思いがけなく、山のからすが、母ざるのそばへ飛んできて、

「ご心配なさいますな、子ざるさんは、お達者で、かわいがられていますよ。」と、自分の見てきたことを話してくれました。

母ざるは、それをきくと、どんなに喜んだでありましょう。幾たびもしんせつなからすに向かって、お礼をいいました。そのうちに雪が降りはじめました。山も、野原も、真っ白になり

ました。

山のからすから、子ざるのいるところを聞いた母ざるは、ある晩山を下って、雪の野原を歩いて、子ざるのところへたずねてまいりました。

それは、寒い晩で、子ざるは、箱の中のわらにうずまって、眠っていました。すると、だれか起こすものがあります。驚いて、目をさますと、いままで夢で見ていた、なつかしい母親が、顔の上からのぞいているのでありました。

「お母さん！」

「しっ、しずかに、いま、おまえをしばってある鎖を切ってやるよ。」

母ざるは、指のつま先からも、唇からも血を出して、とうとう堅い鎖を切ってしまいました。そして、ふたりは、たがいに抱き合って喜び、ころげるようにして、雪の中を山の方へと逃げていくのでした。

雪の上には、二ひきのさるの足跡と、ところどころに落ちた赤い血のあとが残っていましたが、神さまは、この親子をかわいそうに思われて、かりゅうどの追いかけてこぬようにと、夜明け方から、ひどい吹雪となさいました。それで、なにもかも真っ白になって、あとがわからなくなってしまいました。

正ちゃんと、かね子さんは、朝、起きてみて、子ざるがいなくなったので、どんなにびっくりしたでしょう。けれどお山へ帰ったと知ったら、「それは、よかった。」といって、きっと、

喜(よろこ)んでくれたにちがいありません。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　11」講談社
　1977（昭和52）年9月10日第1刷発行
　1983（昭和58）年1月19日第5刷発行
底本の親本：「小学文学童話」竹村書房
　1937（昭和12）年5月
初出：「愛育　2巻11号」
　1936（昭和11）年1月
※表題は底本では、「子《こ》ざると母《はは》ざる」となっています。
※副題は底本では、「母《はは》が子供《こども》に読《よ》んできかせてやる童話《どうわ》」となっています。
※初出時の表題は「小猿と母猿」です。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：酒井裕二
2016年12月9日作成
青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

子ざると母ざる

母が子供に読んできかせてやる童話

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　小川未明
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/